# talk! talk! talk! 建築家・山本理顕さん

建築家

## 山本理顕さん

世界中から注目を集める建築家・山本理顕さん。建築を設計するプロセスや設計コンペにて、写真表現は非常に重要な役割を担うのだという。同じ建築でもアングルの切り取り方で見え方が全然違ってくるのが面白い、という建築家ならではの写真の楽しみを語って頂きました。

**プロフィール**

**やまもと・りけん　1945年生まれ。1971年東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修了。1973年山本理顕設計工場設立。2007～横浜国立大学大学院工学府Y-GSA教授。**
**主な作品（受賞）に岩出山町立岩出山中学校（毎日芸術賞）、埼玉県立大学（日本芸術院賞）、公立はこだて未来大学（日本建築学会賞作品賞）、東雲キャナルコートCODAN（グッドデザイン賞金賞、BCS賞特別賞）、横須賀美術館（神奈川建築賞、BCS賞）福生市庁舎、ナミックス・テクノコア（BCS賞）など。近年のコンペ受賞作品として天津図書館（2009年）、チューリッヒ国際空港複合施設（2010年）、ソウル江南ハウジング（2010年）など。その他、北京、ソウル城南、アムステルダムなどでも複合施設、公共建築、集合住宅を手掛ける。**
**主な著書に『新編 住居論』（平凡社ライブラリ）、『つくりながら考える／使いながらつくる』（TOTO出版）、『地域社会圏モデル』（INAX出版）など。**

## Beginning 出会い

**建築家はほとんど例外なく写真オタクだというほど、写真は重要な表現方法**

建築家にとって、写真とはどんな存在でしょうか？

建築家にとって写真表現は最も重要な表現方法の一つです。建築を設計するプロセスでも、あるいはクライアントにその建築の内容を説明するときにも、あるいは設計コンペのときにも、写真表現は非常に重要なのです。設計をするときに沢山の模型を作ります。そしてその模型写真を様々な角度から撮って、実際に設計した建築がどのように見えるか検討します。写真の撮り方次第で全く違った建築に見えるので、ライティングや背景やアングルには細心の注意を払います。パソコンの画面で修正したりしますが、やはりきちんとした写真を撮るというのは建築家にとって大切な技能の一つなのです。旅行に行って好きな建築や都市の写真を撮ることもあるし、これから作る建築の周辺環境を写真に撮ることもあります。建築家はほとんど例外なく写真オタクだと思いますね（笑）。

写真の善し悪しの判断もできなくてはいけませんね。山本先生の模型の写真を見ますと、本物の建築に見えます。

必ずしも本物のように見せることを目的にするわけではありません。ときには非常に抽象的な写真を撮ります。自分がどのような建築を目指したいのか、どのような構造システムで作るのか，どのような原理で作るのか、それを確認するために抽象的な模型をいくつも作ります。もちろん実際の建築にできるだけ近づけるように作ることもあります。今はCG（コンピューター・グラフィック）のテクニックが非常に進んでいますから、模型よりも簡単にリアルな絵を作ることができます。でも、スケール感を確認するには模型が圧倒的に有効です。50分の1スケールの模型には、同じスケールの人形を入れて上から写真を撮ったり，下から撮ったり，様々な角度から写真を撮ってスケール感を確認します。チューリッヒの計画は27万平米という巨大建築なので、1/1000、1/500、1/300、1/100、1/50というような様々なスケールの模型を作って何度もシミュレーションを繰り返します。

すごい作業ですね！　その色んな知識や考え方から、新しい建築が生まれるんですね。

本当にすごい作業で（笑）、知識はもちろん必要ですけど、知識というのはそのときの建築によって違うんですよ。だからその都度知識を吸収しているという感じでしょうか。知識だけではなくて、どのような環境の中に作るかということで建築はその都度全く変わってしまいます。環境に対する解釈は、それぞれの建築家の考え方によって全く違ってきます。つまり単に知識だけで建築ができるわけではありません。

## Pleasure 楽しみ

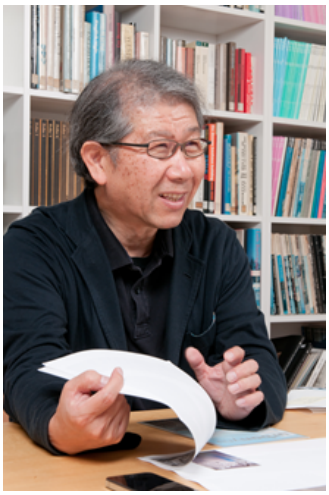
**バルセロナで見かけた市場の商品レイアウトに魅かれ、シャッターを切ったことも**

建築予定地や建築現場の写真は撮られるのですか？

自分でも撮りますし、連れて行ったスタッフも撮ります。僕は全体を撮るというよりも気がついたときに気になった物を撮るようにしています。土地が広いとどこを撮ったら全体なのかもわからないので、シンプルに、断片的だけれども気になったところや気がついたところを撮ります。撮っているときは自分の目で見たり、体験することが大切ですから、撮りつつも、写真に頼り過ぎないようにとは気をつけています。その場所がどんなところなのかというのは、やはり自分で体験しないと分からないと思います。でも記憶には限界がありますから、後で確認するという意味では写真は非常に有効的な手段なんです。もう一度その場所の環境を正確に確認できますから。

一つの作品を作るときに、どのくらい現場に行かれるのですか？

大きさや規模も違いますので、その時々でかなり違います。横須賀美術館を作ったときは事務所からも近かったので工事が始まる前から通っていて、始まってからも頻繁に行っていました。ただ、そういう場所には一人で行くのではなくて、建物が立つ前になるべく多くの人たちと一緒に行くのがいいんですよ。役所の人たちと行ってもいいし、小学生の子どもたちと行ってもいい。それで、そのとき一緒に行った役所の人や子どもたちとフランクに話をします。その場所をどんな風に感じたのかをたずねたりしなが



らコミュニケーションをとるのがいいんですよ。一人でその場所に行って何かがひらめいたりするものではないんです。もちろん工事が始まっていれば、記録として必ず毎回「何月何日こうなった」と建築現場の写真を撮ります。

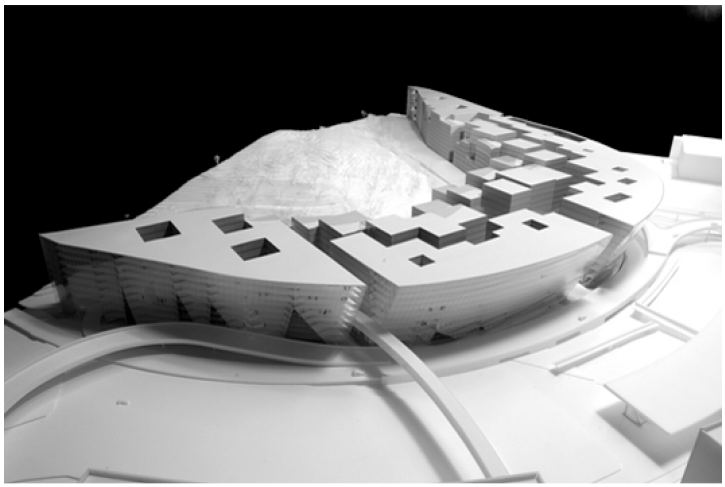
山本先生はチューリッヒ空港の国際コンペで最優秀賞を獲得されていますが、そのときもコミュニケーションを重視されていたんですか？

どんな建築でもコミュニケーションが大切という点は同じです。チューリッヒのプロジェクトは、ターミナルビルがすでにあって、そのすぐ横にブランドショップとかホテルや教育施設やイベントホールをつくって、チューリッヒの文化的な中心をつくるプロジェクトです。そこに会議ができるホールがあったら、飛行機で来て、会議をしてそのまま帰ることもできる。空港にホテルを作ったり、コンベンションセンターを入れたり、大きな会社を誘致したりというのは世界的にも初めての試みです。チューリッヒはヨーロッパの中心的な場所ですので、かなり前からそういうことを考えていたみたいです。要はどのような国でつくっても、その国の文化に敬意を払うということが重要だと思います。
「スイスらしさとは何か」ということがコンペに参加した建築家たちに問われました。私は時計に代表されるような"緻密さ"だと思ったのです。スイスは政治のシステムも経済のシステムも、あるいは医療や薬や様々なエンジニアリングにしても、極めて緻密です。その"緻密さ"は一種の国民性なのではないかと思いました。ですからそのスイスの緻密さを表現できるような建築にしたいと思ったのです。20センチの柱のような非常に細い材料を選んだのも、その緻密さを表現したいと思ったからです。

山本先生は海外でも広くご活躍されていますが、海外に行かれたときには写真を撮られるんですか？

バルセロナへ講演に行ったとき、市場へ行ったら商品がきれいなレイアウトで展示してあってビックリしました。羊の首とかが並んでいて、思わずシャッターを切りました。色合いもとてもきれいに展示されていて、そのレイアウトが日本と違うなっていうのも印象的でした。イベリコ豚のすぐそばにワインがあるから、思わず飲んでしまいます（笑）。スペインって、生活する人たちにたいして本当に楽しそうに街を作るんですよ。ただ働くだけでなく、絶対「楽しむ」っていうスタンスなんです。だって、スペインに居ると我々も昼間からお酒飲んでいても恥ずかしくないですからね（笑）。自由で面白いところです。だからバルセロナには面白い建築がたくさんあるんですよ。バルセロナの人のように楽しむことをもっと考えると、日本ももうちょっと面白い都市になるんですけどね。

## Photo's 作品紹介



チューリッヒ国際空港複合施設（スイス、チューリッヒ市／2016年第一期工事完成予定）
© Riken Yamamoto & Field shop

横須賀美術館（横須賀市／2007年）
© Riken Yamamoto & Field shop

岩出山町立岩出山中学校（宮城県岩出山町／1996年）
© Mitsumasa Fujitsuka

熊本県営保田窪第一団地（熊本市／1991年）
© Shigeru Ohno

東雲キャナルコートCODAN（江東区／2003年）
© Riken Yamamoto & Field shop

mmas
Formatge Gouda de Cabra
16,20
mmas
Formatge Fumat
10,70
mmas
19,10
mmas
Formatge de Règim Moll de L'alzina Baix en Sal
18,70
mmas

Plum Sauce
Black Bean Sauce
SWEET MANGO
Rodan Josh Paste
ÇİÇEK

SINDRIA- SANDIA
WATERMELON
MANGO
COCO
MANGO

## Future これから

**同じ建築でもアングルの切り取り方で見え方が全然違ってくるのが面白い**

現在、横浜国立大学Y-GSAで、建築家をめざす学生さんたちを教育されているなかで、プロの建築家にとっての写真やコンペでの見せ方などは厳しく指導されているのですか？

厳しくはないです（笑）。でもいい写真を撮ったときは褒めますよ。自分で作った模型の写真を撮ってくるわけなんですが、ダメなのは模型がダメなだけじゃなくて、写真の撮り方がダメだというときもあるんです。優れた作品を撮る学生は、ちゃんとライティングからどう撮ったらよく見えるかがちゃんとわかって写真を撮ってますね。
写真を撮るというのは我々にとってはすごく大事です。ただ撮るだけじゃなくて、どういうアングルでどういう風に切り取るかによって見え方が変わってしまいますからね。写真はすごく伝達情報量が多いから重要なんです。
建築史の本に載っている写真というのはひとつのアングルなんです。その建築はそのとき撮ったアングルとして記録されている。写真と一緒にインプットされちゃいますから、違うアングルからの見え方は分からない。そのときの建築の情報を伝達するメディアは、写真しかないんです。いずれにしても写真はすごく重要で、依然としてこれからも重要であると思います。

建築における写真の存在というのは今後変化するのでしょうか？

最近の新しいデジカメにはムービー機能がついているのもありますよね。あれも写真と呼ぶなら、この間のコンペでムービーを作ったのですが、それはとても効果的でした。建物の中に入っていこうとする臨場感はムービーでないとわからないですね。その場所にいないのに、あたかもいるかのような体験ができる。バーチャルだけれども、その中にリアリズムがある。実際に建築ができても写真のようには見えないですが、写真としての画像の効果と建築とがうまく表現できると実際の建築がより面白くなるんです。この間、ある建築家が作った建物を舞台にした映像を見ました。それは3Dの映像だったんですけど、すごくきれいでした。遠くのところと手前とに、全部ピントが合っているのにビックリしました。大体動くものって、どこか一ヶ所にピントが合っている。3Dって面白いですね（笑）。全部にピントが合う。だからものすごくリアルで……。本物よりリアルできれいだと思いました（笑）。全体を自転車でスーッと動いて行くんですが、動いた視点でずっと撮っていて、建築の中に入ると動きがゆっくりになる。その映像を見て、写真って色んな可能性があるんだな、と思いました。現実に行って体験するのとは全然違います。写真は撮った人の思想を伝達できる。実際の建築をただリアルに再現するんじゃなくて、それを写真として切り取った、撮った人の考え方が伝達できるものなのです。

今後どのような写真を撮っていきたいと考えられてますか？

同じ建築でもアングルの切り取り方で見え方が全然違ってくるのが面白いですよね。集中してファインダーの中を見て、対象をどう切り取るかというのは、実は建築や模型を撮っているときにいつも考えていることなんですけどね（笑）。

写真は、建築をただ再現するだけではなく、それを写真として切り取り撮影した人の考え方が伝達できる重要な表現方法だと語る、山本理顕さん。

これまでとは異なった視点から建築の面白さを味わいたいと思います。また横浜国立大学Y-GSAから巣立った学生さんたちの作品を、街なかで目にする日を楽しみにしています！

コンテンツトップへ戻る

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社ニコン 映像事業部
株式会社ニコン イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.